はじめに

本報告集は，多言語 Web 教材「TUFS 言語モジュール」に含まれる 17 言語のうち 11 の言語，すなわち，インドネシア語，朝鮮語，フィリピノ語，ベトナム語，ラオス語，モンゴル語，アラビア語，スペイン語，フランス語，ポルトガル語，および日本語についての **1. 音声概説**と，ロシア語，フランス語，朝鮮語についての **2. 韻律分析**の 3 つの報告を収録している。以下では前者の構成について述べる。

1. 音声概説は各言語の音声，音韻構造についての概括的記述であり，直近の先行研究までの成果を取り入れ，それらの総括を試みている。その枠組みの原型は，当初「TUFS 言語モジュール」の中の「発音モジュール」設計案として提案されたものであった[1]。しかし発音モジュール最終設計案を決定する過程の議論において，発音教材そのものは実践的な練習問題を中心にした構成とし，音声についての解説は学習者が発音を効率的に習得する上で必要な限りでの記述にとどめるべきとの意見が提出された[2]。

その結果発音モジュールは，「理論編」と「実践編」との 2 本立てによる並行開発を行うこととし，前者は後者にとっての理論的基盤を成すとともに，目標言語についての音声学的・音韻論的知見を深めようとする学習者のためのリファレンスを提供するものとなった。既にオンライン化されている「TUFS 言語モジュール」の「発音」モジュールは上の「実践編」にあたるが，本報告集はもう一方の「理論編」として出版するものである。音声概説では，11 言語全てについて以下の構成を共通のものとした。

1. 使用地域と人口
2. 規範および方言の概略
3. 音節
4. 母音と子音
5. 文字と発音
6. プロソディー―アクセント・リズム・イントネーション―
7. 音声の多様性

各項目の順序は個別言語的特徴に準じて，若干異なる場合がある[3]。また声調を有する言語であるベトナム語，ラオス語の記述においては，上記以外に声調の項目を設けている。

---

[1] 中田（2004）「TUFS P モジュールにおける音韻構造の導入」.『言語情報学研究報告 1』. 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」. 東京外国語大学地域文化研究科. pp.35-40.
[2] この点の詳しい経緯については，木越勉（2004）「TUFS P モジュール最終設計案」. 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」. 東京外国語大学地域文化研究科. pp.55-73. を参照。
[3] ベトナム語，インドネシア語，フィリピノ語，ベトナム語では**文字と発音**の章を**音節**や**母音と子音**の章より先に置いている。

以下，各項目の記述内容について述べる。

1. 使用地域と人口，2. 規範および方言の概略

Web 教材「TUFS 言語モジュール」の各言語トップページには，使用地域と人口についての簡単な紹介とともに，習得の対象とする発音の位置づけ（多くは規範的ないしは標準的とされる発音，または共通語とされる変種の発音）が述べられているが，上記 2 項目はこれらについてその形成過程にも言及しつつ詳述するものである。

3. 音節，4. 母音と子音

3. 音節の項では対象言語に現れる音節構成の類型が記述され，**母音・子音**音素の音声的実現や，言語によっては**プロソディー**―アクセント・リズム・イントネーション―における韻律的特長の記述のための枠組みを提供する。

4. 母音と子音は，母音・子音の各体系の概略を述べた後に，両者の音素目録とその音声的実現を用例と共に例示している。音素・音声表記には統一して国際音声字母（IPA）を用いた。また母音については日本語の母音を併記したプロット図を，子音については調音点・調音方法による分類表を設けているが，これらは国際音声学会による母音・子音の一覧表に倣った[4]。音素目録に続いて，各音素体系の主要な特徴を記述している。

5. 文字と発音

文字と発音については，その体系が言語によって大きく異なるため，特に共通の枠組みを設けていない。なお文字の発音表記については前項目同様，統一して IPA 記号を用いた。

6. プロソディー―アクセント・リズム・イントネーション―

音声の強さや高さ，長さの変化などの超分節的特徴についての記述を含んでいる。言語によって研究の状況が一様でないため，ここでも統一的な記述の枠組みは設けていない。

7. 音声の多様性

方言による地域差や発話状況による違いなど，音声の地域的・社会的・文体的多様性について，その主だった特徴について述べている。音声の多様性については，分節音的要素のみならず，超分節的要素についての記述をも取り入れた。

---

[4]国際音声学会編（竹林滋・神山孝夫訳）2003:『国際音声記号ガイドブック―国際音声学会案内』，大修館書店，東京．p.280-281.（原題 *Handbook of the International Phonetic Association. A Guide to the Use of the International Phonetic Alphabet*, 1999.）なお言語によっては，子音の調音点や調音方法の分類が IPA による一覧表とは必ずしも完全には一致していない。